

鹿島神宮の謎

2014. 10. 28

大化の改新（西暦645年）以前に、常陸国（日高見の国）には、一大豪族（蝦夷か？）がいて現在の茨城県を支配していた。

そこで祭られていたのは、他と同様に自然神（国つ神）であったが、奈良の纏向（まきむく）勢力の東国支配により、征服（ヤマトタケル東征？）される。

その際、その神社の宮司・中臣氏は、鹿島神宮の宮司であると共に、奈良に出てきて、物部氏の庇護のもと、東大阪の枚岡（平岡）に館を構え、大和朝廷に仕えた。

それが、中臣鎌足が出現する前の中臣氏の位置であった。祭祀を行う仕事である。そこで、枚岡神社を創設し、中臣氏を祀った。朝廷より、鹿島神宮の宮司も兼ねるために、鹿島一帯を荘園として与えられていた。それが、現在にもつながっていく。

大化の改新で、中臣氏の養子・中臣鎌足（百済の王子？）の出現で、血筋は藤原氏と中臣氏（大中臣氏）の2つに別れていくが、政治を藤原氏が、宗教（神道）を中臣氏が担い、権力を集中していく。

京都に平安京を遷都するときに、仏教を奈良に置き去りにし、または比叡山の上に追いやることで、企みは成功していく。

春日大社（藤原氏を祀る）を、奈良の仏教の押さえとするように、東北への備えとして、鹿島神宮（中臣宮司）と香取神宮を配置した。そこを拠点として、坂上田村麻呂や源頼義らが出陣していく。

以上、これで鹿島神宮の謎が解けた気がする。藤原不比等にとって、「仏教」と「蝦夷」が最大の敵だったのでしょう。